

# 幼児教育史学会

## 第15回大会プログラム

---

---



2019年12月7日（土）

白梅学園大学・白梅学園短期大学 J棟

## 【第15回大会開催のご案内】

幼児教育史学会 第15回大会実行委員会

会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。  
幼児教育史学会第15回大会を12月7日(土)、白梅学園大学・短期大学で開催します。  
皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

### <開催要領>

○期日 2019年12月7日(土)

○場所 白梅学園大学・白梅学園短期大学(〒187-8570 東京都小平市小川町1-830)

### ○タイムスケジュール

9:30 10:00 13:00 14:00 14:30 15:00 17:30 18:00 20:00

受付	研究発表	昼食	総会	休憩	シンポジウム	移動	懇親会
----	------	----	----	----	--------	----	-----

研究発表の開始時間は10時00分です。

○大会参加費・懇親会費(前納方式は採りません)

	会員	非会員	大学院生
大会参加費	1,000円	1,000円	無料
懇親会費	5,000円	5,000円	3,000円

○受付

会場(J棟J26教室)横で行います。

受付で参加費をお支払いください。名札はご自身のものを探してお持ちください。ご所属等が変わられた際は、新しいカードを用意しておりますのでご利用ください。

非会員の方は、記名用紙にご所属とお名前等のご記入をお願い致します。

○研究発表

①研究発表時間は、一人あたり25分(研究発表20分、質疑5分)です。

②発表内容は未発表の内容に限ります。

③発表者が遅刻の場合は、発表資格を失います。ご注意ください。

④発表に関わるレジュメ、資料などを会場で配布される場合、60部以上をご用意ください。

## ○昼食

12月7日（土）は大学構内の生協食堂（I棟3階）は11:30～13:30、生協売店（I棟1階）は10:00～14:00の間営業しております。キャンパス周辺に食事ができる店はありません。最寄駅（西武国分寺線鷹の台駅）のコンビニ等で事前にご用意されることをお勧めいたします。

## ○懇親会

12月7日（土）のシンポジウム終了後、18時より懇親会を開催致します。1ページの「大会参加費・懇親会費」をご参照ください。

会場は、「中国料理 浜木綿 国分寺北町店」（国分寺市北町2-29-1 TEL 042-407-7080）です。送迎バスがご利用できます。

参加人数把握のため、同封はがきでの事前申込にご協力をお願いいたします。

## ○関連企画

大会翌日、12月8日（日）10:00～12:30 「学会15周年記念事業に関する小報告会」を行います。  
(J棟J14教室) 8ページ参照。

.....

## アクセス

会場までのアクセスについては、プログラムの裏表紙をご覧ください。

## 宿泊

最寄の鷹の台駅（西武国分寺線）付近にホテルはありません。西武国分寺線の乗換駅となる国分寺駅（JR中央線）付近にはホテルがあります。

【自由研究発表】 10 : 00～13 : 00 (J棟 J26 教室)

司会 : 梶 瑞希子 (聖徳大学)  
松島 のり子 (お茶の水女子大学)

1. 10 : 00～10 : 25 エリザベス・グルネリウスの思想形成  
— 弟アンドレアスが残したノートを手かがりに—  
  
発表者 : 有川 優子 (関西学院大学大学院)
  
2. 10 : 25～10 : 50 19 世紀後期シカゴにおける幼稚園運動保守進歩派の形成過程  
  
発表者 : 野尻 美枝 (立教女学院短期大学)
  
3. 10 : 50～11 : 15 北海道「ことばの教室」における幼小中支援体制整備の展開過程に関する研究  
— 北海道深川市「深川市言語治療教室」の事例分析—  
  
発表者 : 田中 謙 (日本大学)
  
4. 11 : 15～11 : 40 功刀嘉子の保育論  
— 『保育教材 幼児の遊びと指導』(1944 年) の検討を中心に—  
  
発表者 : 佐藤 浩代 (東洋英和女学院大学)
  
5. 11 : 40～12 : 05 野口幽香の少女・青年期  
— 二葉幼稚園創設の背景の一つとして—  
  
発表者 : 松本 園子 (白梅学園大学)
  
6. 12 : 05～12 : 30 斎藤公子 — その人と保育実践  
  
発表者 : 宍戸 健夫 (愛知県立大学)
  
- 12 : 30～13 : 00 全体討論

【昼食】 13:00～14:00 (I棟3階 生協食堂)

【総会】 14:00～14:30 (J棟J26教室)

【シンポジウム】 15:00～17:30 (J棟J26教室)

テーマ：「子どもの遊びが生まれるとき—よみがえれ、文化の力—」

企画者：首藤 美香子 (白梅学園大学)  
司会者：長井 覚子 (白梅学園短期大学)  
話題提供者：首藤 美香子 (白梅学園大学)  
指定討論者：周東 美材 (大東文化大学)  
浅井 幸子 (東京大学)

〈趣旨説明〉

子どもが「遊ばなくなった」「遊べなくなった」といわれて久しい。だからからなのか、保育や幼児教育の現場では、遊びの重要性が強調され、子どもの自発的で自由な遊びを、発達や社会化を促すための学習体験になるよう方向づける取り組みがいつそう求められている。だが、子どもにとって遊びの意義や魅力は、こうした教育学的、心理学的観点にとどまるものではなかろう。今回は、子ども期の「文化としての遊び」に注目し、児童文化がひとつのジャンルとして確立された1920年代を、遊びをめぐる言説・実践・消費文化・メディア・表象を連関させながら俯瞰する。そして、新しく子どもの生活世界にもたらされた音や声、語り、デザインや色、手触り、におい、味わい、動きとともに、子ども期の遊びの意味や価値がどう変容したのか、「子どもらしさ」に対する人々の認識や感情がどう再編されたのか、その経緯と諸相を探索し、「子どもの視点」から、その功罪をも問いたい。

【懇親会】 18:00～20:00 中国料理「浜木綿」国分寺北町店  
(送迎バスがご利用できます)

## 自由研究発表 要旨

### エリザベス・グルネリウスの思想形成 —弟アンドレアスが残したノートを手がかりに—

有川 優子（関西学院大学大学院）

本発表は、今までの研究では扱われたことのないグルネリウスに関する資料から、彼女の思想形成の一端を明らかにするものである。エリザベス・グルネリウス (Elisabeth M. Grunelius 1895-1989)は、ルドルフ・シュタイナーRudolf Steiner 1861-1925)の弟子であり、シュタイナー幼稚園の創設者である。近年グルネリウスに関する研究は、馬場(2018) や杉岡(2016) によってなされているが、未だ少ないのが現状である。シュタイナー幼稚園はシュタイナーの死後、グルネリウスによって創設されたため、シュタイナー幼児教育にはシュタイナーの思想だけでなく、彼女自身の思想も含まれていると馬場や杉岡は指摘している。そこで本研究は彼女の思想形成に焦点を当てる。特にグルネリウスの子ども時代や家族に関する資料から彼女の思想形成について明らかにする研究は現段階では存在しない。

本発表では、グルネリウスの弟であるアンドレアス・グルネリウス (Andreas Nikolaus von Grunelius 1900-1987)のノートを基に、トーマス・メイヤー (Meyer, Thomas, .H)が書いた記事(『ドイツにおける人智学研究からの報告』Mitteilungen aus der Anthroposophischen Arbeit in Deutschland 1987 S. 305-310)に依拠しながら、エリザベス・グルネリウスが育った家庭環境を考察する。グルネリウス家にはシュタイナーの思想に大きく影響を受けていた家庭教師が存在しており、弟はその家庭教師から教授を受けていた。エリザベス・グルネリウスは弟の家庭教師とは別であったが、少なからず、その影響を受けていたのではないかと考えられる。

本発表では弟の記事からエリザベス・グルネリウスの思想形成の一端を明らかにする。本発表では弟の記事からエリザベス・グルネリウスの思想形成の一端を明らかにする。

### 19世紀後期シカゴにおける幼稚園運動保守進歩派の形成過程

野尻 美枝（立教女学院短期大学）

19世紀後期のアメリカ幼児教育史において、スーザン・ブロウ (Susan Blow) に代表される保守派とパティ・スミス・ヒル (Patty Smith Hill) に代表される進歩派はよく知られている。しかし、同時代に保守進歩派が果たした教育的役割や意義については、これまで十分に検討がなされてこなかった。

保守進歩派の代表的な人物は、シカゴを中心として活躍したエリザベス・ハリソン (Elizabeth Harrison) である。しかし、ハリソンがなぜ「保守進歩派」に分類されるのか、「保守進歩」の様相を詳しく伝える国内文献はない。また、どのような経緯で同派の実践が誕生したのかについても不明瞭なままである。そこで本研究は、19世紀後期シカゴにおける保守進歩派の形成過程を二つの視点を用いて明らかにする。一つは、エリザベス・ハリソンに幼児教育を教授したアリス・パットナム (Alice Putnam) への着目である。彼女の幼児教育観、実践についてアメリカで出版された文献等から検証する。第二にエリザベス・ハリソンへの着目である。ハリソンの著書等から彼女の同時代の幼児教育観や実践を検証し、これら二つの視点を通して19世紀後期シカゴにおける保守進歩派の形成過程を実証する。

19世紀後期シカゴの幼稚園は、日本の幼児教育、特にキリスト教主義保育と深い関わりをもっている。A. L. ハウ (Annie Lyon Howe) もハリソンとほぼ同じ時期にシカゴで幼児教育に従事していた。したがって、シカゴを拠点とする保守進歩派を探究する本研究は、日本の幼児教育との相関性の検証に繋がる基礎的研究として意義があると考えられる。

# 北海道「ことばの教室」における幼小中支援体制整備の展開過程に関する研究 —北海道深川市「深川市言語治療教室」の事例分析—

田中 謙（日本大学）

本研究は北海道「ことばの教室」の幼小中支援体制整備の展開過程の特質を、北海道深川市「深川市言語治療教室」の事例分析から明らかにすることを目的とする。

北海道深川市は旧空知支庁北空知に位置する基礎自治体であり、面積は 529.42km<sup>2</sup>、人口は1975（昭和50）年で36,000人（総務省統計局国勢調査）である。

この深川市では1976（昭和51）年4月30日に深川市立深川小学校、深川市立深川中学校それぞれ1学級言語障害特殊学級が教育委員会により設置され、ことばの教室が整備された。さらに、翌1977（昭和52）年9月2日には「幼児学級」担当者が民生部福祉事務所より配属された。深川市言語治療教室はこの幼小中の3つの学級が深川中学校敷地内に独立施設形態で整備され、教育行政、福祉行政の連携による担当者の配置により支援体制が整った歴史的経緯を有する。

深川市言語治療教室創設の特質に関しては、分析結果から1976（昭和51）年の開設時（「幼児学級」開設以前）から教育相談、母親教室の実施を通して幼児支援に取り組んでいたこと、教育相談等の実績を基に市議会への請願を行い福祉行政による専任保母の確保が図られたこと、中学校特殊学級設置により幼児支援を実質的に行っていたこと等、幼児期の支援体制整備を基軸に教室経営がなされていたことがあげられる。

発表当日は北海道「ことばの教室」における幼小中支援体制整備の展開過程の特質をより詳細に報告する。

## 功刀嘉子の保育論

### —『保育教材 幼児の遊びと指導』（1944年）の検討を中心に—

佐藤 浩代（東洋英和女学院大学）

1948（昭和23）年に刊行された『保育要領』は、文部省が設置した「幼児教育内容調査委員会」により、GHQのCI&Eヘレン・ヘファナンの指導を受けて作成されたのは周知のことである。また、当該委員の倉橋惣三や坂元彦太郎などについては、著書、談話等により多くが明らかにされているなかであって、委員の一人であった功刀嘉子については、ヘファナンの通訳者として紹介はされているが、功刀自身が保育をいかに捉えていたのかはあまり知られていない。先行研究（加藤繁美, 2016）では、功刀唯一の著書『保育教材 幼児の遊びと指導』「幼稚園、託児所の設備」の内容を根拠に、『保育要領』「四 幼児の生活環境」は功刀の執筆によると明らかにしている。しかし、執筆全般についての検討はなされていない。

本研究では、『保育要領』の作成において役割を果たし、また、ヘファナンの通訳としても活躍した功刀の保育論を、戦時下1944（昭和19）年に刊行された著書の検討を通して明らかにする。本書は、同僚であった関猛との共著であり、同じく高良富子が序文を寄せている。功刀は前編「幼児と保育」を、「幼児とは何か」「保育とは何か」をテーマに構成し、全般にわたり具体的な記述により、事例や研究結果を踏まえて執筆している。

功刀嘉子は1926（大正15）年に東洋英和女学校幼稚園師範科を卒業後、保母を経て、アメリカイリノイ州エバンストンに留学している。幼児教育を専攻し、1935（昭和10）年から1948（昭和23）年まで母校の教員を務め、「幼児教育内容調査委員会」に招集された1947年には、東洋英和女学院保育専攻部主任として、保母養成において責任ある立場にあった。

## 野口幽香の少女・青年期 —二葉幼稚園創設の背景の一つとして—

松本 園子（白梅学園大学）

1900（明治33）年、華族女学校幼稚園の保育者、野口幽香と森島峰は、東京麹町の民家を借りて、地域の貧困家庭の子どもたちを対象とする小さな幼稚園を開設した。「二葉幼稚園」と名付けられたその園は、1906年にスラム街四谷鮫橋に園舎を建て園児も増え、事業を拡大していった。その後1917（大正6）年に社会事業に転換し、「二葉保育園」となった。「二葉幼稚園」は、明治期の“貧民幼稚園”として著名であり、また本格的な保育所的保育施設のさきがけという評価も定着している。野口等がなぜこの幼稚園を開設したかについては、通勤途上で出会う街頭の幼児をみて、この子達にこそ保育が必要だと考えたというストーリーもよく知られている。

報告者は特に野口幽香に注目し、二葉幼稚園創設の意義を探りたいと考えている。野口の生い立ちについては自身が興味深いエピソードを語ったものが公刊されている（神崎清『現代婦人伝』中央公論社、1940）。これによれば、野口は1866（慶応2）年、維新の動乱期、現在の兵庫県姫路市で生まれた。新しい時代を前向きに生きた父と、明るくおおらかな母は、娘が広く知識を吸収し学問することを望んだ。小学校卒業後は男子ばかりの姫路中学校に進学したが継続できず中退、19歳で東京女子師範学校（後、東京女子高等師範学校）に入学した。学校の寄宿舎で同室の上級生尾藤初子は幽香に「東洋のフレーベルになる」という夢を語り、これが幽香の将来を決めたという。

報告者は現在、野口の日記や作文、書簡他の史料を解読中である（東京女子大学比較文化研究所・野口文書史料）。これらを手がかりに人物野口にせまり、二葉幼稚園開設・運営の意味を明らかにしていきたい。

## 斎藤公子 — その人と保育実践

宍戸 健夫（愛知県立大学）

この研究は、戦後の保育実践を担った一人である斎藤公子（1920-2009）の生涯を明らかにしようとするものである。

斎藤公子は、1938年、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）保育実習科に入学。ここで、教授であり附属幼稚園主事である倉橋惣三と出会う。しかし、斎藤は倉橋に学びながらも、幼稚園ではなく、保育園保育者の道を選ぶことになる。

斎藤は、戦後、自然のゆたかな深谷市郊外に、父母たちとともに、保育園をつくり、産休あけ保育、障害児保育、長時間保育、学童保育などの実践をつぎつぎと展開していく。それは、どんな家庭の子どもにも差別することなく、一人ひとりが発達する権利のあることを実現しようとする実践であった。

なお、斎藤公子『子育てに魅せられて—奥深き未知の国』（青木書店、1997）は、斎藤の自伝であり、本研究の参考としている。



## 【関連企画（大会翌日）】 学会 15 周年記念事業に関する小報告会

日時：12月8日（日）10：00～12：30

会場：白梅学園大学・短期大学 J棟J14教室

全体的な論文構想、および上・下各巻ごとに執筆者から中間報告をいただき、ディスカッションを行う予定です。記念出版の趣旨につきまして、会報第 28 号掲載の「報告」を再掲いたします。

---

---

### 幼児教育史学会15周年記念出版について（趣旨文）

幼児教育史学会理事会は、理事を中心に15周年記念出版編集委員会を組織し、これまで編集の方針、内容、体制の検討、出版社との交渉を行ってきました。以下は、同編集委員会の提案する編集の〈趣旨〉です。

いま幼児教育の世界は、激動を潜り抜けようとしている。どのようにしたら社会全体に幼児教育と保育の一元的な理解が浸透するのか、無償化の先に義務化が検討されるとしたら、その根拠をどのように理解するか、また小学校教育と幼児教育の関係について、さらには営利を目的とする企業の保育事業への参加についてどのように問うか。幼稚園令制定から約 100 年、戦後の学校教育法、児童福祉法制定から約 70 年、幼稚園と保育所はそれぞれが制度として確立して以来の大きな改革期を迎えている。

いっぽう、私たちが研究方法として依拠する歴史研究の分野でも、歴史学がいくつもの新しいチャレンジを生み出して大きな転換をとげようとしている。民衆史、社会史、さらにはグローバル・ヒストリー、それぞれの挑戦は重なりを持ちつつ、独自の主張をもって、歴史学の大きな転換を生み出しつつある。

私たちは幼児教育を歴史的な方法で分析研究する小さな学会である。しかし女性の社会参画と家族の変化、人格の土台としての乳幼児期への注目、教育への市場原理の浸透など、研究者として社会に対する責任を問われる問題群に直面し、自らの研究を厳しく鍛えねばならない立場に置かれてきた。学会として発足 15 年のささやかな歩みではあるが、積み重ねてきた議論をここで書物（論文/コラム集）として出版しようと考えている。

学会なので、思想信条、したがって研究の戦略も様々な構成員が研鑽のために集っている。そのなかで今回の記念出版では、以下の 2 点を共有し立脚点とした。

第一は、一国史を相対化してみることである。教育史研究でも、21 世紀に入ってようやく比較教育史や交流史研究が積極的に取り組まれるようになった。

現代の幼児教育は国連や OECD などの積極的な関与もあって、国際的な影響関係のなかで制度も思想も展開している。こうした時代にふさわしいグローバルな視野からの歴史研究を心がけた。また、グローバルな視野からナショナルな教育史を相対化することは、特に日本をフィールドにした研究者がローカルな視野からナショナルな教育史を相対化する試みとも対応している。足元の先人の営みを世界的な時間軸、空間軸のなかに位置づけてゆくよう努めたい。

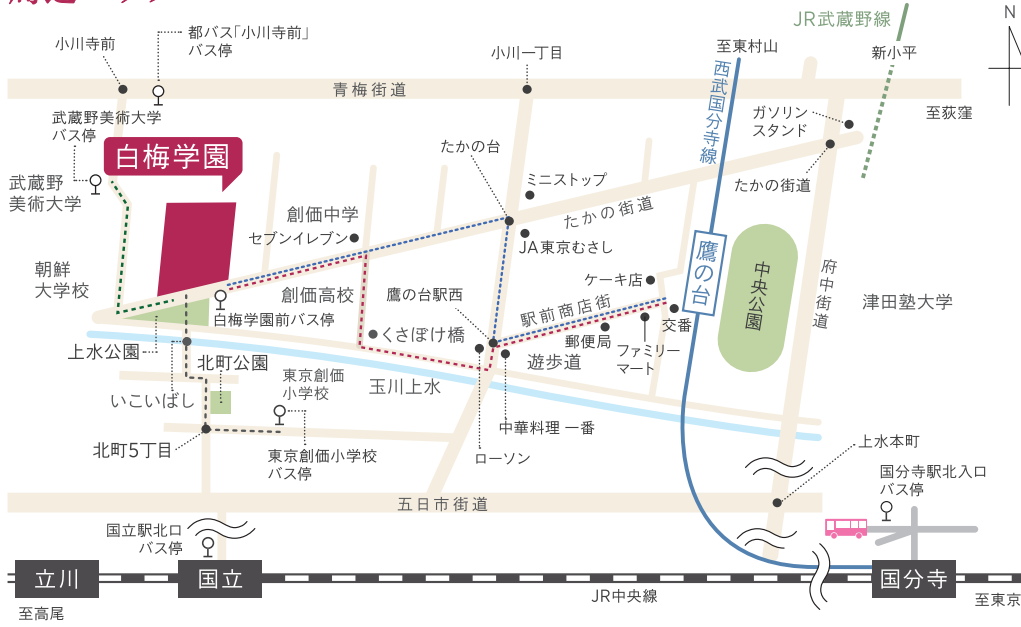
第二は、そのような視野から時期区分を設定したことである。上下 2 巻に分け、それぞれをおおよそ 3 つの時代的なテーマで区切って全体を構成した。

上巻では 1) 19 世紀以前、2) 近代幼児教育制度形成期、3) 1920 年代以降の学校教育改造運動と保育施設の成立の時期を、下巻では 1) 1930 年代後半から 1950 年代までのファシズムと戦争に対する反省と改革の時期、2) 1960 年代以降の科学化と教育内容の改革期、そして 3) 1990 年代以降の ECCE/ECEC の成熟期である。国によって地域によって、時期のずれはむしろテーマを優先して弾力的に区切ることにした。時期区分のなかにその時期のテーマが明確に浮き上がることを期待している。

この構成を考えるなかで、編集委員会は幾度となく全体でまたグループで議論を交わしてきた。この討論の過程、編集の過程が学会としての研究の深まりに転化してくれることを祈っている。忌憚のないご意見、ご批評をお聞かせいただきながら、学会としてこの難しい時代に応えられる内実に近づいてゆきたい。

2019 年 5 月  
幼児教育史学会 15 周年記念出版  
編集委員会一同

# 周辺マップ

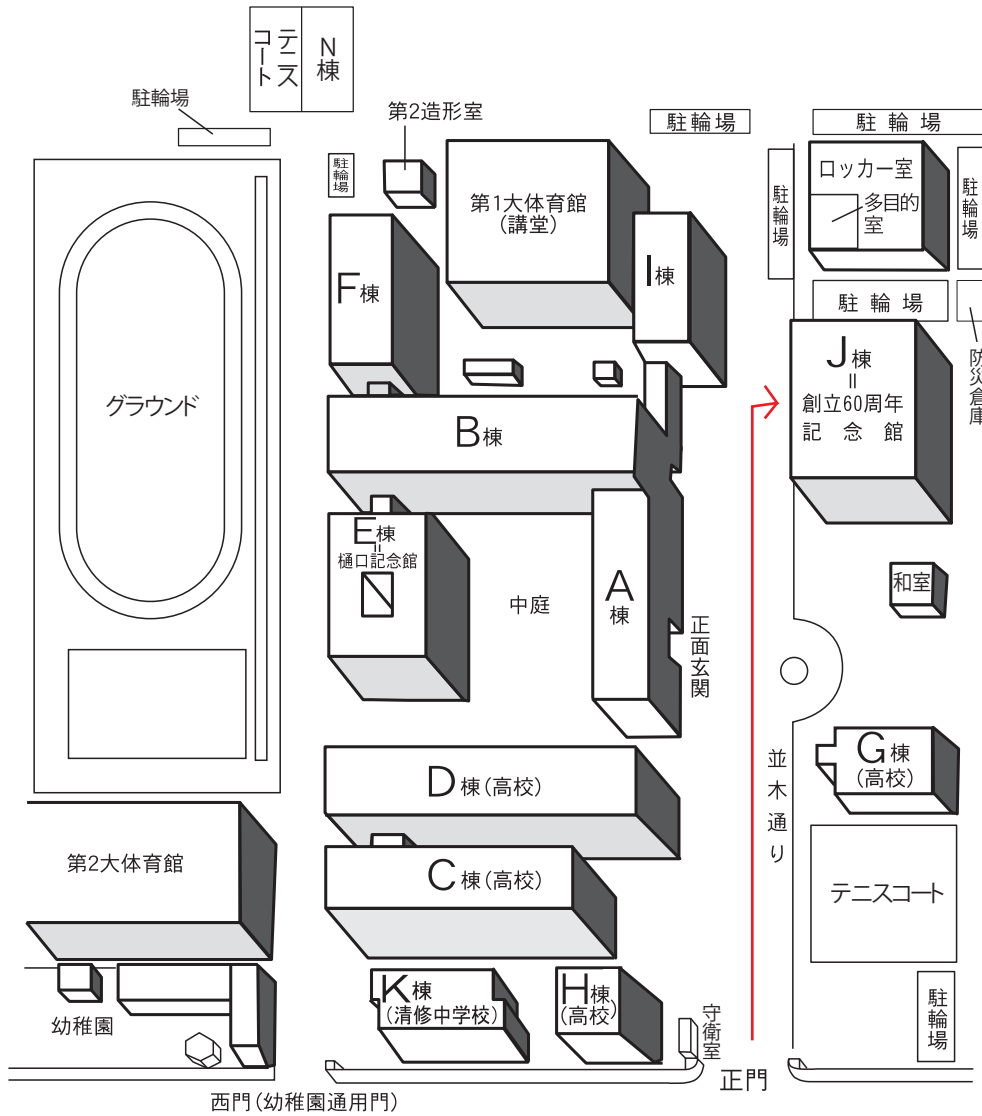


## 主要駅からのアクセス例

※所要時間は目安です。

<b>東京</b> JR中央線	<b>八王子</b> JR中央線	<b>大月</b> JR中央線
<b>新宿</b> JR中央線	<b>立川</b> JR中央線	<b>高尾</b> JR中央線
<b>国分寺</b> 西武国分寺線	<b>国分寺</b> 西武国分寺線	<b>国分寺</b> 西武国分寺線
<b>鷹の台</b> 東京より約60分 新宿より約40分	<b>鷹の台</b> 八王子より約30分 立川より約20分	<b>鷹の台</b> 約75分
<b>本川越</b> 西武新宿線	<b>大宮</b> JR埼京線	<b>横浜</b> JR東海道線
<b>東村山</b> 西武国分寺線	<b>武蔵浦和</b> JR埼京線	<b>川崎</b> JR南武線
<b>鷹の台</b> 約40分	<b>西国分寺</b> JR中央線	<b>府中本町</b> JR武蔵野線
<b>国分寺</b> 西武国分寺線	<b>新小平</b> 横浜より約75分 川崎より約60分	<b>鷹の台</b> 約60分
<b>柏</b> JR常磐線	<b>練馬</b> 西武池袋線	<b>青梅</b> JR青梅線
<b>新松戸</b> JR武蔵野線	<b>所沢</b> 西武新宿線	<b>拝島</b> 西武拝島線
<b>西国分寺</b> JR中央線	<b>東村山</b> 西武国分寺線	<b>小川</b> 西武国分寺線
<b>国分寺</b> 西武国分寺線	<b>鷹の台</b> 約90分	<b>鷹の台</b> 約50分
<b>鷹の台</b> 約90分	<b>鷹の台</b> 約50分	<b>鷹の台</b> 約40分

- 電車をご利用の場合  
西武国分寺線「鷹の台駅」より徒歩約15分、JR武蔵野線「新小平駅」より徒歩約30分、自転車で約13分。
- バスをご利用の場合  
「国分寺駅北入口」より西武バス(武蔵野美術大学行)に乗り、「白梅学園前」下車、乗車時間約20分。



西門(幼稚園通用門)